苦しかった戦争中の暮らし

昭和６年の満州事変から戦時体制に入った日本は、昭和 16 年に太平洋戦争に突入し、昭和 20 年に終戦を迎えます。この間、政治・経済・教育・文化などすべてが戦争中心となります。

戦争遂行が最優先されたこの時代は、食糧不足など、日常生活は極めて厳しいものとなりました。農村地帯だった摂津市域も例外ではありませんでした。また、戦争のために亡くなった人もたくさんおられます（摂津市域の戦没者数 423 名）。ともかく今では想像できないほど苦しい時代だったのです。

千里丘駅で入隊する兵士を送る→

召集令状が来て軍隊に入ることになった青年を村から駅まで行列して見送った（昭和 15 年）

↓防空道路

千里丘駅と鳥飼大橋を一直線で結ぶ道路。戦争中に造られ、戦闘機の離発着もできた。昭和 30 年代初めごろの写真

↑陸軍少年航空兵（昭和１８年）

この方は鳥飼下の方で、中学 2 年生の時に入隊され、19 歳で戦死された。写真は 18 歳の時

←戦没者の鳥飼村合同葬儀

多くの方が戦死された

勝久寺の釣鐘も供出された→
軍艦や大砲などの武器にする
ため金属が集められた

↓愛国婦人会
戦地に送る慰問袋を持っている

↑味舌小学校児童の農作業
食糧確保のため、子どもたちも連日農
作業をした

↑戦時中の子どもの作品（昭和１８年）
学校教育は習字も図画も音楽も戦時色一
色となった

↑遊休地の開墾（昭和１８年）
東光精機の工場内にも畑が作られた

思い出語り

※大阪へ肥を汲みに行っているとき、大空襲に遭ってしまいました。焼夷弾がばらばらと落ちてきて、飛び散った薬品がへばりついた物は、家でも人でも電柱でもじりじりと燃えるのです。あたりは火の海になってきます。あわてて肥桶を積んだ荷車から牛をはずして、尻をたたきながら長柄の橋を渡って逃げて帰りました。長柄の橋は爆弾で大きな穴がいくつも開いており、死体が散乱していました。

※出征兵士を送るとき、村の人が宮さんに集まって、列を作って千里丘駅まで行きます。私たち子どもも太鼓を打ちラッパを吹いて行列に参加しました。

※アメリカの空襲を避けるために、大阪市内の子どもたちが周辺の農村にやってきました。この辺には井高野から子どもたちが来て、学校の講堂で生活していました。そのためクラスの人数は 80 人ほどにふくれ上がりました。